

う。」

言はれるまゝに、莊吉は客を残して先に眠ってしまった。そして翌朝早く眼覚めた時には、客は囲炉裡の前へ横になったまゝ、軽い躰を立てゝゐた。

莊吉は急いで朝飯を焼き出した。そして粗末な朝飯の用意が出来てから客を揺起すと、客は驚いたやうに起上った。何故か客は大変慌てゝゐる様子だった。莊吉は客の食べた朝飯の残りゝで温かな握飯を作つて弁当と思つて客にすゝめると、客は喜んでそれを腰に付けながら、莊吉に詳しい道を訊いて、消えるやうに戸口から去つて行つた。

降積んだ暁の雪の中を、歩きにくさうに遠ざかつて行つた旅人は、戸口に立つ莊吉を峠の曲り目から、一度残り惜しさうに振返つた。

「左様なら！」

思はず声高く呼んで莊吉は片手を高く挙げた。

「左様なら！」と、向ふでも力の籠つた声で応へると其俣黒い合羽の姿は雪の峠に隠れてしまつた、独りになつた莊吉は、急に淋しくなつた。別れ、ばもう会へまいといった旅人の昨夜の言葉が堪らなく懐かしく身裡に蘇生つてきた。

雪の晴れた空にはやがて朝日が昇つて暖かな春の日和になつた。莊吉の家の囲りには雪が解ける水の音が唄のやうに聞えだした。時々大きな雪崩の音も遠い山の方に聞えたりした。

午頃になると、町へ下つた父親が歸つて来た。莊吉が飛出して行つて見ると父親の後には見慣れぬ人が三、四人、役人見た

いな姿でついてゐた。

父親は家に入るなり一人の旅人の姿を見掛けなかつたかと莊吉に訊ねるのだつた。同行の役人見たいな人も、父の言葉を補つて詳しくその旅人の様子を知らした。それは紛れもなく、昨夜泊めた旅人に相違なかつた。

莊吉は、今朝迄の事をありのまゝに話して、旅人が立去つた方角を指さした。

役人見たいな人達は如何にも愕いたやうだったが直様、尋ねる旅人の跡を追ふ事になつて、父親も莊吉も道案内ながら一緒に家を出た。

道々の話で、昨夜の旅人は重い国事犯で、父に同行して来た人達は、その捕縛に向ふ政府の役人である事が解つた。莊吉は愕きもしたが、また何ともいへない心持に打たれた。何故か昨夜の旅人が氣の毒な氣がした。そして黙つて父親の後から従いて行つた。

間もなく、昨夜の旅人の姿を莊吉達は発見した。然しそれは、谷間の雪崩の下に埋れて、息の絶えた無惨な姿であつた。雪に埋れたため傷一つ受けず、安らかな顔で旅人は死んでゐた。

「や、握飯がある。」と、旅人の身体を検べてゐた役人の一人は、傍の雪の中から掘出した二つの握飯を取上げた。雪に埋れてゐた握飯は、まだ温かさうに湯気をたてゝゐた。

莊吉は何とも解らない涙を雪の上に落した。

(大正10年)